



マッセ・市民セミナー（ちやいんどネット大阪・マッセOSAKA共催講座）（北摂ブロック）

「保育の質保証のための保育者の役割・援助

～幼稚園教育要領・保育所保育指針改定のなかで～」

内田 伸子 氏
(十文字学園女子大学)

今日の話は三つから成ります。まず、想像力の発達についてお話しします。2番目に、学力格差は幼児期から始まるのか、ここ10年ほど私が取り組んできた研究成果に基づいて検証します。3番目に、新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針の改定に伴って、保育計画や保育記録の取り方、保育協会の在り方などについてご提案します。

1. 想像力の発達 五官を使った体験の大切さ

1-1. 想像力は生きる力

まず、想像力の発達です。五官の「かん」の字は、感覚の感ではなくて感覚器官なので、官が正しいです。五官、目、耳、鼻、口、舌、そういったものを精いっぱい働かせることが、直接体験が豊かになる、想像力が豊かになる近道であるという話から始めたいと思います。

まず、想像力とは生きる力であると私が認識するきっかけになった大事な本があります。それは、ユダヤ人の精神科医ヴィクトール・フランクルの『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—』という本です。フランクルは、ウィーン大学の医学部の教授でした。第2次大戦中、あのドイツ・ナチスがヨーロッパ各地に強制収容所を作り、ユダヤ人たちを家族ばらばらに収容して皆殺しにするという、とんでもない戦争犯罪を犯しました。その収容所の一つ、ウィーン郊外に作られた収容所に囚人として暮らしたフランクルの体験を記した本がこれです。1日に水のようなスープ1杯、パンのかけら一つで辛い労働に従事させる。体が弱ってくると「シャワーを浴びさせてあげる」と言って毒ガス室に連れて行って、40～50人いっぺんに殺してしまう。そんな中で、ユダヤ人たちはだんだん希望を失っていきます。気持ちも荒んできます。そんな中である希望の光がともされました。12月24日にこの収容所は解放されるらしい。そうし



たらまた元の暮らしを取り戻すことができるかもしれない。人々はそんなうわさにすがって、12月24日まで生き続けます。

とうとう12月24日がやってきました。今か今かと解放の声を待ちわびる人々の耳に届いたのは、とても残酷な知らせでした。「あれはデマであった」。途端に収容所のあちこちで悲鳴が上がります。体に何の故障もない若者たちが、あまりのショックに心停止状態になり亡くなってしまうということが起こったのです。

どうしてそんなことが起こってしまったのか。フランクは、体が丈夫な人だけがこの収容所の厳しい生活を生き延びたわけではない。体験が豊かで知識もたくさんある人たちは、内面化への傾向が著しくなって、元の暮らしを思い返すことで、厳しい現実から逃れることができた。そういう人たちだけが、あの厳しい現実を乗り越えることができたのだと、この本で述べています。「人はパンのみにて生きるのではない。想像力によって生きる力が与えられる」ということをこの本は訴えています。

また8月15日がやってきます。皆さま方、今は文庫本でこの本を読むことができますので、二度と戦争を起こしてはいけないという気持ちを新たにするためにも、この本をお読みくださるといいかと思います。

では、ユダヤ人たちに生きる力を与えた想像力は、いつごろから私たちの心の中で働きはじめるのでしょうか。それはとても早いのです。生後10か月のことです。赤ちゃんの頭の中でイメージが誕生します。遊び方が変わってきます。見ているものとは別の世界をイメージの形で頭の中に思い浮かべられるようになると、見立て遊びが起きますし、目の前にモデルがなくても「ママが髪をとかしていたな」という姿を思い出してまねをする、延滞模倣などが見られるようになります。これは記憶が働きはじめるからなのです。

脳の記憶をつかさどるところは、タツノオトシゴのような形をしているので、ラテン語でタツノオトシゴという意味のhippocampus、日本語では海馬です。体験の記憶を記憶貯蔵庫に転送する宅配便のような役割をしています。そして、アーモンドの形をしているのでラテン語でamygdala、日本語に訳すと扁桃体というところで、快・不快感が感知されます。この海馬と扁桃体がネットワークを作って働きはじめるのが10か月です。

赤ちゃんが笑っているときは、扁桃体がとても快適な状態にあるので、海馬



がよく働きます。ものがどんどん覚えられます。しかし、赤ちゃんが泣いているときや怒っているとき、扁桃体は不快感でいっぱいになるので、海馬の働きが抑えられてしまいます。叱られながらやった勉強は身に付かないと言いますが、それは扁桃体が不快感でいっぱいなために海馬の働きが抑えられて、ものが覚えられなくなってしまうからです。

1-2. 社会参照をする子、しない子

また、この時期、個性も見られます。認知革命は3回起こります。1回目が10か月のとき、イメージが誕生する第一次認知革命です。2回目の革命では、ワーキングメモリという情報処理を統括するところが海馬や扁桃体を支配するようになり、情報処理の性能が上がります。プランの力が出てきたり、自分の認識を対象化するメタ認知の働きが出てきたり、因果関係を推論するための精神操作も出てきたりします。これが年長組の2学期以降のことです。さらにもう一回、小学校3年生ごろ、9～10歳ごろに3度目の革命が起こります。劇的な変化が起こって、外界との関わり方が根こそぎ変わってしまうので、私は革命と呼んでいます。前頭連合野という脳全体を統括する部位にシナプスがたくさんできて、脳の働きがぐんと質的に高くなるのです。意思の力や判断力、モラルや情緒などを担っています。また、自分はどんなふうに生きたいかという目標を持って生きはじめます。この革命は30歳ごろまで続きます。若い保育士の先生方はまだ前頭連合野でどんどんシナプスができていてときで、このような研修会に参加してより良い性能の脳が作られているとお考えいただいたらいいのではないかと思います。

もう一つ、10か月の変化としては、イメージを持つようになるので、モノは見えなくなってもあり続けるという物理認識も始まります。「モノの同一性認識」と呼びます。この時期の赤ちゃんは、いないいいないばあ遊びが好きです。「いないいいない」と言って隠れても、「ばあっ」と出てくる先生の顔をイメージで浮かべているので、赤ちゃんはイメージどおりに先生のお顔が見えてうれしくて笑うのです。そんなことが頭の中で起こっているなんて、大人たちは分かりませんが、赤ちゃんが笑ってくれるので、あやすためにいないいいないばあ遊びをします。

これらは赤ちゃんの頭の中に起こる変化ですが、外から見てそろそろイメー

ジが誕生したなと分かる行動があります。10か月ぐらいの赤ちゃんを抱っこしてお散歩して、向こうから犬がやってきた。それに気が付いた赤ちゃんはびっくりして、その後「あれ何？」というように、抱っこしてくれている人の顔を仰ぎ見るような表情を見せます。他者に問い合わせる行動です。これを「社会的な参照」と呼びます。この時期の赤ちゃんとお母さん100組に大学のプレイルームに遊びに来てもらい、慣れたところで、赤ちゃんが見たこともない犬型ロボットのアイボを見せます。どの赤ちゃんも全員びっくりして、慌ててお母さんのところにハイハイで近寄りました。さあ、その後、お母さんに問い合わせるか、問い合わせないかをビデオに撮って観察したところ、100名のうち、お母さんに問い合わせた赤ちゃんは62名でした。残りの38名は、お母さんに近寄ると、お母さんを触りながら、その後は初めて見るアイボの方をじっと眺めていました。

この子たちが1歳半になったとき、同じ実験を繰り返してみました。今度は10か月のときに見せたものとは別のデザインのアイボを見せました。赤ちゃんにとってやはり初めて見るものです。なぜ1歳半の時期を選んだかというと、あんよができるようになるからです。全員が慌ててお母さんのところに近寄りました。社会的な参照をしたかどうかを見てみたら、興味深いことに、10か月のときに問い合わせたお母さんは、今度はお母さんのところに近寄ると「わんわん？」と言ったりしながら、お母さんに問い合わせていました。残りの38名は、お母さんに近寄ると、新しいデザインのアイボをずっと眺めていました。

この時期、子どもは急に言葉をしゃべるようになります。言葉の習得はすごく早くて、お母さんのおなかの中にいるときから始まります。受精して18週目から、子宮の中の受精卵で神経活動が始まると言葉を拾いはじめるのです。もう体、形は全部出来上がっています。そして、脳の新皮質の神経細胞はネットワークが作られはじめます。その時期に聴覚神経系が働きはじめます。お母さんの体を流れる血液の「ざあざあ」というホワイトノイズのような音、それに混じっているお母さんの「ドキドキ」という心臓の音、さらにお母さんがおしゃべりする声が、音刺激として胎児の耳に届いているのです。

そして生まれた後、赤ちゃんが泣いていると、「よしよし」という、おなかの中で聞いていた音とよく似た音が聞こえてきます。羊水を通して聞こえてくる音と空気を通して聞こえてくる音は違いますが、メロディーやリズムが一緒



なので、赤ちゃんは胎内にいたときのことを思い出すらしく、泣きやみます。その後、いろいろなお世話を受けながら、言葉の意味をどんどん獲得していきます。おっぱいを飲んでいる間は、平均100語の意味が分かっています。そして、10か月を過ぎると喃語^{なんご}の形で、「わんわん」「にゃんにゃん」「ばば」「うまうま」「ばあば」など、意味のある言葉を五つか六つ言います。

理解語はたくさんあっても、発語器官が出来上がらないと発音できません。だから、おっぱいを飲んでいる間はうまく話せませんが、立ち上がることで発語器官が出来上がるので、それまでストックしていた音声素材を自分でも発音できるようになります。この実験に協力してくれた赤ちゃんたちも、1週間に40語も新しい言葉を自分の語彙のレパートリーに付け加えるという語彙爆発の段階に入っていました。

赤ちゃんの話す言葉を品詞で分類してみると、お母さんに問い合わせた社会的参照をした62名の言葉は、60%が挨拶や「こんにちは」「はいはい」「おいちーね」「きれいね」などの感情表現語でした。これは人間関係に敏感な人たちではないかと気質の検査をしてみると、人間関係に敏感であることが確認できました。

社会的参照をしなかった38名は、ほとんどが名詞でした。しかし、5%だけ動詞が含まれていました。「おっこった」「いっちゃった」「なくなっちゃった」、救急車を見ながら「びーぼーびーぼー言ってる」、二語文を話している子もいました。これはモノの変化や動きに関心がある子どもたちではないかと気質検査をしてみると、モノの因果的な成り立ちに興味があるタイプであることが確認できました。

子どもたちがどんな遊びを好むかを調べてみると、社会的参照をした62名はおままごとが好きでした。絵本のコーナーでは生活絵本、物語絵本を好むので、私たちは「物語型」と名付けました。38名はプラレールで遊んだり、カプラのような積み木を天井まで積み上げたり、積み木を並べて押してドミノ倒しを楽しんだり、砂場で穴を掘って水を流してダムを作ったりするような遊びが好きでした。絵本のコーナーでは、乗り物図鑑や生き物図鑑など図鑑類が好きだったので、私たちは「図鑑型」と名付けました。

物語型の一番端にいる子どもが、遺伝的負因があって、18週ぐらいの胎内環境の条件があまり良くないといったことが重なったときに染色体が異常に増え



過ぎてしまうダウン症の子どもです。図鑑型の一番端にいる子どもは、これも遺伝的負因があって、受胎して18週ぐらいのお母さんのおなかの中の状態が良くないという条件が重なったときに脳の一部に損傷が起こってしまったアスペルガーや自閉症の子どもです。ですから、障がいと言っても、定型発達の子とも全く違う種類の子ともではないのです。連続的なのです。人に敏感な子もいれば、モノの方に興味が引かれる子もいる。それでちょっと極端なのが自閉症やアスペルガーで、人には愛想がいいけれどちょっと知能が遅れているのがダウン症の子どもです。物語型、図鑑型の一番端っこにいます。この変化は連続的です。

ですから、障がい児ということで分けするのではなく、どの子どもも強みと弱みを持っているので、個性と考えて、加点主義で良いところを伸ばしてあげられるように保育をしていただきたいと思います。子ども同士の学び合いの力はものすごく大きいので、子どもたちが一緒にいるだけで、遺伝的負因を持って条件が悪かった子どもでも、同じように遊んだり楽しんだりすることができるのです。

1-3. 性差の秘密は？

さらに面白い違いがありました。62名の8割は女の子、38名の8割は男の子でした。次に疑問になるのは、性差とは一体どこから来るのだらうということです。心理学では、知能テストをすると、女性と男性で得意分野が違うことが分かっています。女性は、「カ」の付く言葉をたくさん言うという言語発達の指標になるテストの成績が高いです。また、棒を反対側の溝に配置していくという手先の器用さの指標になるテストで得点が出ます。男性は、地図を読み取るときに必要な心的回転課題と呼ばれる課題やダーツのような課題で得点が出ます。例えば、プロゴルファーのうち、男性の方がホールインワンを多く出します。どうしてこのような違いがあるかという、バロン＝コーエンの『共感する女脳、システム化する男脳』では、脳の成熟の違いがあると書かれています。

言語や計算や概念は左脳がつかさどります。青信号になったときに、すぐに飛び出さずに「ちょっと待て」とブレーキを掛けたりするのが左脳です。ですから、理性の脳などと呼びます。また、音楽を聴くときには右脳が活躍します。地図を読み取ったり、平面から立体を想像したり、心的回転課題を解くときに



必要な活動は右脳が担っています。また、「ママ怒ってる」とママの感情を読み取る、感じ取るのは右脳ですが、怒っていると名前を付けるのは左脳です。ですから、右脳は感性の脳、左脳は理性の脳、はやりの言葉で言うと左脳は認知を担う脳、右脳は非認知を担う脳ということになります。左脳と右脳は連絡し、制御し合ってまとまりのある行動を作り出します。左脳と右脳の連絡と制御を受け持っているところが間の脳梁というところで、脳梁の容積は女の子の方が大きいです。脳の成熟が女の子の方がアンバランスなのです。

神経活動が始まると、神経細胞に木の枝状の樹状突起が伸び、軸索が伸びて別の神経細胞にくっつきます。この軸索の間を通して信号が別の神経細胞に伝わると、何回か伝わるうちに、この周りにミエリン鞘（髄鞘）という蛋白質の膜が巻き付くようになり、裸線ではなくなります。そうすると信号の伝わり方が速くなります。ですから、どのぐらいミエリン化された細胞があるかで、神経活動が始まっているかどうかを推定することができるのです。

そのような方法で、ハーバード医科大学のGeschwindとGalaburdaが亡くなった赤ちゃんの脳を調べたところ、女の子の左脳が右脳よりも成熟している、男の子は全体的に脳の発達がゆっくりで、左脳と右脳の間には違いがないということが分かりました。しかも、もう一つ重要なことが分かりました。なぜ男の子の脳の発達がゆっくりかかというと、受胎して18週目、将来男の子になるxy型の性染色体を持った受精卵では、テストステロンという男性ホルモンが分泌されます。男の子になる準備が始まり、このときに体つき、陰茎、筋肉、骨の組織など、男性として生きていく上で必要な条件が整えられています。この時期、成長ホルモンが抑えられるので、男の子の方が発達がゆっくりなのです。だから脳の発達もゆっくりなのです。

この時期、妊娠中のお母さんの栄養状態が良くなかったり、ニコチン中毒やアルコール依存症だったり条件が良くなないと、テストステロンの分泌が悪くなります。この事実から、私たちは大事な発達の見方を教えてもらえます。今回、子どもの発達過程に寄り添って環境を用意するという文言が、3法である幼稚園教育要領にも保育所保育指針にも教育・保育要領にも書き込まれました。この発達の見方を教えてくれるのが、受胎して18週ごろのお母さんの体の中で男の子の受精卵の発達がゆっくりだという事実です。

私たちはどうしても見える力ばかりを頼りにします。ハイハイができた、あ



んよができるようになった、字が読めるようになった、書けるようになった。何ができるか、それが少しでも早い方がいいと思っている。特に保護者の方はそうです。でも、今日からその見方を変えてください。発達が停滞している、あるいは後戻りしているように見えるときに、心・体・頭の中で大事な力が成熟しているということなのです。ぜひそのような見方を保護者の方にも伝えてください。発達がゆっくりしている男の子に焦ってしまうお母さんが多いのですが、「そんなことはない。今、大事な力が伸びているんだから、ゆっくりと急き立てないで待ってあげてください」というアドバイスをしていただきたいと思います。

男の子は受精卵の発達がゆっくりですから、vulnerability（被損傷性）、傷付きやすさは、男の子の方が女の子よりもずっと高いということが知られています。生存率でそれを見てみましょう。女の子を100とすると、男の子になる受精卵は120です。男の子になる受精卵は、遺伝病にかかって流産してしまう可能性が高く、お母さんが転んだりすると、男の子になる受精卵はxy型の性染色体ですから、y染色体が傷付くと代替が利かないので、流産してしまいます。女の子の受精卵はxx型染色体で同系のものが二つ入っているので、1個が傷付いても残りのもので保障できるので、妊娠は続けられます。女の子の方が打たれ強いのです。

その後、誕生のときに106に減ります。その後も男の子は病気にかかる重いことです。18歳で100対100となり、大体同じ割合の男女がこの世に存在することになります。その後も男性は環境ストレスに弱いために減り続け、50歳で95、67歳で70、87歳で50、100歳で21、おばあさん五人におじいさん一人となります。女性は長生きなのですが、これは種の保存という観点から見ると合理的な数字です。

しかし、女性も安心ばかりはしてられません。50歳ぐらいになると、閉経を迎える準備で、お肌をつやつやにしてくれる女性ホルモンの分泌が悪くなり、しわが出はじめます。もう一つ、見えないところで変化が起こります。骨にカルシウムが沈着しにくくなるので、すかすかになって骨粗しょう症にかかります。ですから、今の元気なうちに子どもと一緒に風や太陽を浴びながら外遊びをしてください。食事も豆類や海藻類、小骨のある魚を食べて丈夫な骨を作り、カルシウムを貯金しておいてほしいと思います。やはり見えない力はとても大



事なのです。骨だって見えないですからね。骨に貯金をというのを先生方には今日はアドバイスしたいと思います。

やはり男の子は甘えん坊さんが多いです。だから、男の子も女の子もかわいがって保育をしてほしいのですが、かわいがり方が違います。女の子は3歳になればもう小さなレディで、先生が赤ちゃんのお世話をしていると手伝ってくれたりします。とても頼もしい女友達のような成長ぶりを見せてくれます。男の子は泣き虫です。ちょっとしたことでびーびー泣きます。また、スキンシップを求めます。6歳、小学1年生の作った詩です。「おかあさん けさ さむいね ぼくのこと ぎゅっとしていいよ そしたらおとくだよ」。この詩を1年生の教室で私が語って聞かせますと、男の子は恥ずかしそうに、でもうれしそうに笑います。よくぞ自分の思いを言ってくれた、代弁してくれたと思うのだろうと思います。

こんなふうに男の子と女の子の成長の仕方が違います。小学校6年生ぐらいまでは甘えん坊さんが多いです。しっかりスキンシップを与えてあげてください。小学校6年生ぐらいになると男の子は急に背が伸びて喉仏が出てきて声が低くなります。そして、急にひげも生えてきて、今まで「ママ、ママ」と言っていたボーイソプラノの男の子が、「おふくろ」と低い声で言ったりして、母親から自立していきます。しっかり自立してもらうためにも、小学校6年生ぐらいまでは男の子は甘えん坊さんですから、かわいがって育ててほしいと保護者の方にお伝えください。

1-4. 経験が豊かだと想像世界も豊か

また想像力の話に戻します。見えないイメージ、見えない未来を思い描くためには材料が必要で、五官を働かせた直接体験や、人から聞いたり調べたりした疑似体験、合わせて「経験」が豊かであるほど、想像の世界、イメージは豊かになります。しかし、想像と経験は同じものではありません。目の前の情報から連想される経験は断片的で不完全ですから、幾つかのものを組み合わせたり、足りなければ別の経験を取り出してきたりして、まとまりのあるイメージを作ります。鳥を見て飛ぶものを連想し、飛行機を発明したライト兄弟のように、想像の可能性があるわけです。想像は創造の泉のようなものなのです。

先生方の園でもぜひ取り組んでほしいのはお話し遊びです。今度、「表現」

の中に絵本の読み聞かせや紙芝居などが入ってきましたが、さらにお話し遊びも組み込まれました。絵カードを子どもの前に置いて、「お話しして」「一緒にお話ししよう」と、これについて話すような体験を与えていただければと思います。

2歳5か月の女の子の典型例です。「うさタン、ピョンピョン」「イテュー、ころんだよ、石（絵の石を指す）ころんだ」「エーン、エーン、うさタン、エーン（顔に手を当て泣きまねをする）」。

3歳8か月の女の子の例です。「あ、うさこちゃんが上を見てる。お月さんを見てるのかな。ピョンピョンはねてる。ダンスしてるのかしら」。解釈を語ってくれました。語彙も経験もものすごく増えてきますから、それを駆使して並々ならぬお話を作ってくれました。「うさこちゃんが、お月さまを見ながら、楽しくダンスしていました」「上ばかり見て踊っていたので、石ころにつまづいて、水たまりに尻もちをついてしまいました」「頭から、水ぬれになった。うさこちゃんは泣いてしまいました」。こんなふうにとまりのある語りになっていきます。

では、語り方は幼児期にどんなふうに変わるのでしょうか。以前、私はお話し遊びの実験をして調べていたら、幼児期に2段階を経て語り方がまとまってくる事が確認できました。第一段階は3歳ごろです。母語の文法が全て獲得され、接続詞も獲得されます。それから時系列に、「だって」「だけど」と違うことを言うような逆接の接続詞も獲得されるので、語り方がまとまってきます。

さらに5歳後半には談話文法が獲得されます。談話文法とは、文章や語りの時間的な展開を作り出す枠組みのことで、文法は文を作る枠組みですが、談話文法は談話を作り出す枠組みです。談話文法が獲得されると長い語りができるようになります。事件や物語を語ることができます。絵本の読み聞かせ体験をたくさん持っている子どもほど、とても豊かな語り方をするということが確認されています。

この実験をやっていたのは1980年代でした。大学の近くの小日向台町幼稚園という区立幼稚園、公立幼稚園にお邪魔し、園長先生のお部屋の片隅をお借りして一人ずつ子どもを呼んできて、先ほどのような絵カードにお話を付けてもらう実験をしました。5歳10か月のタカコちゃんに、全部課題が終わったので、お部屋に戻ってもらおうと思ったら、彼女はこう言いました。「あのね、私ね、



夏休み前にお友達のおうちで絵本作りごっこしたの。そのとき、お話作ったんだよ」「へえー、何ていうお話作ったの」「星を空へ返す方法っていうの」「面白そうね。覚えてる?」「うん、覚えてる」「じゃあ、そのお話、私に聞かせてくれない」と頼んでみました。「いいよ。聞かせてあげる」と言って、タカコちゃんは7月に作ったお話を9月の末に思い出しながら私に語り聞かせてくれたのです。

「7月15日はうさぎさんの誕生日です。今日は7月15日、うさぎさんの誕生日だから森の動物たちが集まってきました。そして、みんなで食事をしているときにケーキの陰から星が出てきました。星はみんなに言いました。『ほくね、空からおっこっちゃったの。だからね、ほくをね、空に返して』と言ったら、みんなはびっくりしました。『空に返すって?』『そうさ、ほくは空の星さ』『星?』と、みんなはびっくりしました。

そこで、象は言いました。『おれにまかせてよ』と、象はその星を自分の鼻に入れると、勢いよく飛ばしました。それでも星は、おっこってしまいました。そしたら、こんどはみんなで相談をして、うさぎが言いました。『そうだよ、ながーい笹を持ってこようよ。それに星のをせてあげてさ、そしてさ、また、その笹をさ、伸ばしてさ、空までさ、送ってあげるのさ』とうさぎが言うのと、みんなは『そうしよう』と言って笹をとってきました。

そのなかでも一番笹が長いのをとってきたのはネズミでした。ネズミは、手がゆらゆらになって、すごく長い笹を持ってきました。みんなでその先に星をのせると、土の中に埋めて一日待ちました。そうすると、その笹は、一日だというのに、ぐんぐん伸びて空に届きました。そして、星は空に帰ることができました。

そして、その誕生日が終わったあと、みんなが、家で空を見ると、キラキラ光ってる、とてもきれいな星がありました。みんなはその光ってる星を、きつと落ちてきた星だと思ったのです」

いかがでしょうか。とてもきれいな構造のお話に仕上がっています。この実験のときには全て、家でどのように絵本の読み聞かせをしているのかということも保護者にアンケート調査をしました。タカコちゃんは赤ちゃんのときから読み聞かせをされている。しかも、弟がいて、区立図書館に出掛けていって、絵本のコーナーで絵本の読み聞かせの専門家の読み聞かせを楽しんだりしてい

ました。どんどん新しい絵本が出版されるので、そういうものを区立図書館ではそろえていますから、それを親子で一緒に楽しんだりということをしている子どもでした。概して、このような絵本体験の豊かな子どもほど、このような豊かな語が多いということも確認されています。

まず、7月15日はうさぎさんの誕生日。誕生会には付きもののケーキの陰から星が出てくるという事件が起こります。どうにかしてお空に返してあげたい。象さんが鼻でびゅっとやりますが、うまくいきません。次にみんなで相談をします。うさぎさんの提案で笹を運んできました。笹は成長が早い。こんな素朴生物学を幼児期の終わりまでに多くの子どもたちは獲得するようになります。みんなが笹を取りに行った。仲間の中で一番長い笹を運んできたのはみそっかすのネズミ君でした。ネズミ君は手がゆらゆらになって、一番長い笹を運んできました。その一番長い笹のてっぺんに星を乗けて、土の中に埋めて一日待ちました。一日だというのに笹は天まで伸びていって、星は空に帰ることができたのです。不思議なことが起こったんですね。この「一日だというのに」の「のに」という逆接の接続助詞は、こんなことは本当は起こらない、うそっこで起こるんだということを告げる手法です。タカコちゃんの頭の中では、うそと本当というのが、はっきりと区別されていることが分かります。

うそと本当のエピソードを作るために、物語や映画、演劇などではカットバックという手法が使われます。夢の中の出来事という演出です。このカットバックは日本語では表現しにくいらしいのです。以前、私はスタンフォード大学で、第2言語としての英語の習得に母語がどんな影響を与えるかという研究をしていました。スタンフォード大学は、サンフランシスコから高速で30分ほど南下したところにあるスタンフォードというまちにある私立大学で、世界でランキング第3位の非常に有名な大学です。世界中から研究者や留学生がやってきているので、心理学部の附属保育所、附属幼稚園、附属小学校には多国籍の子どもがたくさん学んでいます。その子たちに協力してもらいました。

字のない絵本を理解してもらって、まず母語で語ってもらい、しばらくしてから英語で語ってもらうという実験をしました。男の子と犬がカエル君を飼っているのですが、2ページ目でカエルがこっそり逃げ出してしまう場面があります。この語りを全部テープに撮ってみたら、非常に面白い違いが分かりました。



日本語や韓国語を母語とする子どもの語り方はこうでした。「男の子と犬がベッドで眠っていた。そして、カエルがこっそり逃げ出した。そして、それからどうなった」という時系列因果で語るのがほとんどでした。しかし、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、タリシュ語（イランの言語）、チェコ語・スロバキア語、スウェーデン語、イタリア語など、インド・ヨーロッパ語族の言語を母語に持つ子どもの語り方はこうでした。「カエルがこっそり逃げ出した。どうしてかという、男の子と犬が眠りこけていて、物音に気付かなかったからだ」。後から理由を付け加えるのです。つまり、結論先行の因果律で語ることがもっぱらでした。

語順を考えてみるとよく分かります。日本語も韓国語も最後に動詞が来る言語ですが、インド・ヨーロッパ語族の言葉は全部イエス・ノーが先に来ます。動詞が先に来ます。だから、いったんある意見を述べたら、後は理由を言うしなくなるのです。ところが日本語や韓国語は最後に動詞が来るので、「○○しますと言おうと思っていたのに、相手が渋い顔をしているのでしません」と変えることができます。だから、相手・配慮・関係調整型の言語なのです。それに対して、インド・ヨーロッパ語族は、自己主張完結型の構造をとる言語なのです。これがコミュニケーションスタイルにも影響を与えています。

というわけで、日本語は時系列因果で語る。それに対して、英語は結論先行の因果律で語るということが分かったわけです。

結論先行の因果律を作り出すためには、可逆的な操作が使われていると考えられています。日本や韓国の子どもは、可逆的な操作が難しいのだろうか、欧米の言葉をしゃべっている子どもよりも遅れるのだろうか、これを調べてみようと思いました。ピアジェというスイスの発達心理学者は、お話を再話させる実験をして、7～8歳、小学校3年生ぐらいから、可逆的な操作を使った語り方ができる、あるいはカットバックが含まれたファンタジーを再話できるということを発表しています。

日本で追試してみたら、カットバックが何か所にも入っているために、大学生でも筋がごちゃごちゃになってしまうのです。やはり材料が難し過ぎるのではないかと思いました。幼稚園や保育園の年長の子どもたちはファンタジーを好むようになります。センダックの『かいじゅうたちのいるところ』や、図鑑型の子どもが好きな科学絵本、かこさとしさんの『むしばミュータンスのぼう



けん』の中にそういうファンタジーが含まれています。これらを好きになるということは、カットバックが分らないと面白さが分らないファンタジーです。から、年長の子どもはもうカットバック表現、可逆的な操作が使えるのではないかという仮説を立てて、二つの出来事をつなげるだけのすごく簡単な課題に変えて実験してみました。

「マサオちゃんは石につまづいて転んでしまった。そして、血が出て泣いています」という時系列の話（順向条件）と、「マサオちゃんは泣いてしまった。だって、さっき大きな石につまづいて転んでしまったからです」という結果を先に出して後から理由を付け加える話（逆向条件）の二つを再話させると、逆向条件は全て時系列にひっくり返ってしまいました。

アサガオの花がアサガオの芽になるという絵を見せると、「本当は芽からアサガオになるんだけどな」と迷います。「この絵からはお話は作れない？」と私が言うと、「アサガオが小さくなって芽になった」と言ったり、「アサガオが咲きました。アサガオが咲いて、種が取れたので、種をまいたら、また芽が出ました」と言ったり、見事にひっくり返してしまいます。しゃべる順番に出来事が起こったというふうに変えてしまうのです。

小学校1年生になる直前までは、今のように時系列になってしまいます。やはり日本の子どもは日本語談話が時系列談話だから無理なのかと諦めかけたのですが、あることを思い出しました。2歳代の終わりごろから子どもたちは「だって、だって」という言葉を使うようになります。「だって、お兄ちゃん貸してくれないもん」と泣きながらお母さんに訴えたりします。あの表現をこの場面で思い出してもらったらどうだろうと私は考えました。

「お人形さんの足が取れちゃいました。だってさっき、ミワちゃんとマリちゃんが両方から引っ張りっこしちゃったから」のように、「『だって』というつながりの言葉を付けてあげれば、前に起こったことと後に起こったことの順番を変えずにお話できるよ、まねして言うてみてくれない？」と3度だけまねしてもらいました。3度まねしてもらっただけで、5歳後半すぎの子は全員が可逆的な操作を使ってつなげることができました。もう可逆的な操作を5歳からちゃんと分かっているのです。

欧米では年長組と小学校1年生で、show and tellという朝の発表会をいつもやっています。その中で言語技術の教育をしています。Language artsとお開



きになったことがあるかもしれませんが、段落の作り方や論拠を挙げて相手を説得するような表現形式の訓練をするのです。しかし、時系列談話の特徴としている日本語も韓国語も、この言語技術の教育は一切しません。これだと、小学校の高学年になって論説文が入ってくると具合が悪いのです。論説文だと何かを批評するので、ある意見を述べて、その論拠を挙げていくという書き方をしますから、それが分からないのはちょっと困ってしまうし、理科のレポート、アサガオの観察日誌を書いてもらおうと、時系列で書かれてしまって、絵日記のようになってしまいます。そしてそれからどうなったと書いていくことが多いのです。

これはちょっとまずいのではないかと思います、日本語版の言語技術の教育をどこかでできないだろうかということで、単元開発費を文科省から頂いて、広島県の安芸高田市立向原小の先生方や、熊本大学教育学部附属小学校の先生方と一緒に「論理科」というカリキュラムを開発しました。週に2時間、小学校1年生から中学3年生まで、論理科に取り組んでもらっています。熊本県や広島県の論理科に取り組んでいる学校では、学力テストの活用力を問うB問題の成績が上がったという、うれしい報告が得られています。

他の子どもたちもそうした言語体験ができないかということで、私は国語の教科書の編集員もしているので、光村図書の国語の教科書の1年生の2学期に論理科という単元を入れるようになっていきます。しかし、シェアは60%ですから、残りの40%の子どもたちは、やはり論理科というものを体験しないことになります。何とかならないか。普段の会話が問題なのです。

5歳後半になると子どもたちは、「どうして」「なぜ」というWHY質問期になります。これがチャンスです。「どうしてお鼻は匂いを嗅げるの?」「どうしてお風呂に入ると手が軽くなるの?」私の娘が5歳のときにお風呂に入りながら質問しました。そういうときがチャンスなのです。「浮力が働いているからよ」と最近の保護者の方はすぐに答えを与えてしまおうとします。そうしたら子どもは考えなくなります。私は何と答えたかというと、「どうしてなんだろうね。どうしてだと思う」と返したのです。

「お花の中に小人がいてさ、『バラの匂い』とか『ユズの香り』とか、頭に教えてるんじゃない?」いい線いっていますよね。「お風呂に入ると手が軽くなるのってさ、お風呂ってあったかいじゃん。お水と違うじゃない。だから、下



から持ち上げてんじゃない?」。これもいい線いっていますよね。それで、そういうときには私は「ああ、そうかもしれない。よく思いついたね」と褒めました。このような会話のやりとりの中で考える力が育っていくので、答えを与えないでほしいと思います。一緒に考え、また考えたり工夫したりしたことを褒めてあげてほしい。そんなふうに思います。そのような会話を通して、論拠や根拠を挙げて説明する力が育っていくのです。

1-5. 友達と心を通わせ・つながり合う心の芽生え

また、友達が複数いると、いざこざが起こります。人の気持ちが分からなくて、自分の思いで動いてしまって、相手を悲しませてしまうことがあります。いつごろから人の気持ちが分かるのでしょうか。「うさこちゃんは赤い色が嫌い、うさこちゃんのお誕生日におばあちゃんが赤いブーツをプレゼントしてくれたんだって、うさこちゃんは どうする? 何て言うかしら?」。人目を気にしてお行儀を良くしたり、我慢したりする心の働きを「展示ルール」と心理学で言います。展示ルールが何歳から獲得されるのかを調べるための実験をしました。

3歳はすぐに答えます。「要らない」「どうして?」「赤嫌い」。3歳は分かりやすいです。4歳は迷います。迷って迷って迷って、答えるまでにものすごく時間がかかるのです。「もらう」と言う子と「要らない」と言う子が大体半々に分かれます。特に発達がゆっくりした男の子に3歳のような「要らない」という答え方が多かったです。5歳は、男の子も女の子もすぐに答えてくれました。3歳とは正反対でした。「喜んでもらう。ありがとうって言う」「だって、おばあちゃんがせっかくくれたんだもの。僕だったら、そうするな」「でも、僕のおばあちゃん、うさこちゃんのおばあちゃんじゃないよ。僕の本当のおばあちゃんは僕の嫌いなものを知ってるから、嫌いなものはくれないけどね」。ああ、このころから人の気持ちが分かるのだ、展示ルールは5歳後半ぐらいから獲得されるのだということが確認できました。

3歳、4歳、5歳のこの違いを私は次のようなニックネームで呼ぶことにしました。「物怖じしない3歳児」「恥ずかしがりやの4歳児」「空気の読める5歳児」です。実は恥ずかしがりやさんのときはとても大事な時期です。4歳の保育室は不思議なことがいろいろ起こります。どうぞ先生方、また保護者の方、4歳さんを急き立てたりしないでください。待つ、見極める、急がない・急が



せない、そして3Hの言葉を掛けてあげてほしいのです。「褒める」「励ます」、そしてちょっと視野を広げるための「広げる」。「ほら、さっきからお友達が待っているわよ。もう1回使ったら貸してあげてくれない？」これが広げる言葉です。決して命令で子どもを動かそうとするのではなく、禁止で子どもをいさめるのではなく、褒める、励ます、広げる言葉で、提案の形で言葉を掛けていたきたいと思います。

4歳の思いを、『灰谷健次郎の保育園日記』に登場するてっちゃん（4歳男児）の言葉に代弁してもらいたいと思います。「てっちゃんはあとから考えてるの。だから、はやくおはなしできないの」「てっちゃんいろんなことばおぼえたいの。てっちゃんのあたまにおしゃべりすることいっぱいあるんだから」。こんなもどかしい気持ちでいます。全身を耳にして、周りのおしゃべりを聞いています。先生方の打ち合わせの言葉だって全部キャッチしています。そして、どんどん取り込んで自分でも使ってみます。4歳は汚い言葉をよく言うと思います。「うんち」とか「おしっこ」とか。先生が「嫌だわ」なんておっしゃると余計に言ったりします。こんなことを通して、「これはみんなの前で言ったらいけない言葉」「これは大丈夫」「こんなこと言うと先生が喜んでくれる」など、言葉の世界を広げていきます。平均的な知能を持った5歳児は1日に20語も新しい語彙を自分の語彙のレパートリーに付け加えていきます。とにかく、赤ちゃんのころから幼児期、児童期になっても、言葉にとっても敏感だという特徴を私たち人間は持っています。

84歳のひいおばあちゃんと2歳のひ孫の会話です。2歳のひ孫が窓の方を見ながら「彼氏いないの」と言いました。ひいおばあちゃんが「まだ彼氏いなくてもいいわよ」と思って、ひ孫が見ている窓の方を見たら、「あ、そうだ」と思い出しました。10日ばかり前に、ひいおばあちゃんがひ孫に向かって、その窓の外の生け垣にカラスがびっしり止まっていたのを見て、「ああ、カラスがあんなに止まっているよ」と言ったのです。1回聞いただけなのに、今日は1羽もないということを見て、ひ孫が言った言葉だったのです。

54歳のおばあちゃんと3歳の孫娘の会話です。お客さまが見えたときにおばあちゃんが「粗茶ですが」とお茶を出した。「どうして粗を付けるの?」「お客さまにお出しするときには、粗を付けるのよ」。しばらくして、また別のお客さまが来たとき、この孫娘が家のネコを抱っこしていました。「かわいいネコ



ちゃんね」とお客さんが言った。「粗ネコです」。こんなふうにとんどん取り込んでいきますから、うっかりした会話はできません。聞いていないと思っても、子どもたちの耳がちゃんとダンボのようになって先生方の会話を聞いていますから、美しい日本語で話すようにしていただきたいと思います。大阪弁で話していただきたいなと思います。一つ目の話題はこれでおしまいです。

2. 学力格差は幼児期から始まるか 幼稚園卒＞保育所卒は本当か？

2-1. 日本の学力低下と考える力の欠如

では、2番目の話に入ります。今、日本は学力低下問題に揺れています。経済協力開発機構（OECD）が、費用対効果を見るために、世界の15歳を対象に国際学力比較調査（PISA）を3年ごとに実施しています。そのPISA調査が測定しているのは考える力です。文章題が中心なのですが、日本は振るわないのです。成績が良くありません。

もっと深刻なのは、日本の子どもは算数・数学嫌いがとても多いことです。理科にも苦手意識を持っている子が多いです。理科離れが心配されています。また、文科省が毎年実施している学力テストでも同じような結果が出てきています。暗記で答えられる基礎・基本問題、A問題は全国平均で8割ぐらい取っているのですが、B問題、文章題、覚えた知識を使って応用するような問題に難があります。20点ぐらいしか取れないのです。カリキュラムを改訂して臨んだ2010年も、活用力は改善されませんでした。2011年からは理科も改訂しましたが、やはり暗記で答えるものは8割方得点を取っているのに、活用力の方は2割ぐらいしか取れていません。これは問題です。

しかも、2010年、文科省の幼稚園課が学力テストの成績を比べてみたところ、幼稚園卒の子どもの方が保育所卒の子どもよりも成績がいい、これは幼児教育の大切さを検証した初めての調査だということを共同通信に発表して、共同通信が新聞社各社に流して、2010年7月28日には新聞各紙にこの報道が発表されました。でも、幼稚園卒の方が保育所卒よりも成績が高い、これって本当だろうか。私はこれをまず疑問に思ったのです。

2-2. 解決策は自由な遊び

このとき、教育社会学者とマスコミは、学力格差は経済格差を反映している



ので、保育所に通っている家庭の方が所得が低い家庭が多く含まれているためではないか、片親家庭も保育所の方に多いのではないかという発表をしました。これにも私は疑問を持ちました。リサーチクエスションはこうです。経済格差といつも連動していて、学力低下をもたらす真の要因「媒介要因」が隠れているのではないか。これを暴き出すことはできないかと思いました。このとき、私は国から非常に大きな研究費を頂くことができたので、それを使って、この問題を実際に検証してみようと思いました。

日本、韓国、中国、ベトナム、モンゴルの大都市の幼児3、4、5歳児、各国3,000名ずつを対象に、個人面接で、全て読み書きの発達を調べてみました。また、この子たちを担当している幼稚園や保育所の先生方にはアンケート調査で、絵本の読み聞かせ体験や文字環境がどうなっているのか、文字の指導をしているのかといったことを尋ねました。親たちにも家庭の蔵書数はどのくらいか、親たちは本が好きか、絵本の読み聞かせはやっているか、家庭の所得はどのくらいか、教育に、例えば塾にどのくらい投資しているかといったことを尋ねました。そして、子どもたちが小学生になるまで追跡して、再調査を受けてもらいました。さあ、どうなったか。結果はもう全てまとまって、金子書房から出版しています。

まず、日本の結果です。2009年度の調査です。2009年度の子育て世帯、0歳から18歳までの子どもがいる世帯の平均所得は691万円でした。691万円を境にして、それより低所得か高所得かということと、読み書き能力との関連を調べてみました。71のひらがな文字を読む力は、所得とは全く関係がありませんでした。書く力は模写テストをしました。鉛筆を持って字を書く準備がどのくらいできているかということで、丸や三角やひし形などの図形、「わ」などの非対称の文字を模写してもらったテストでしたが、これについても所得との関連は全くありませんでした。

知能テストの代わりに、絵画語彙検査を実施しました。これは世界中で標準化されているもので、心理学では知能テストの代わりに語彙検査を使うことが多いのですが、語彙検査で子どもの語彙を調べてみたところ、ここに家庭の所得との関連が出てきたのです。収入が高い家庭の子どもの方が語彙が豊かだったのです。

これは塾に通わせているからなのだろうかと考えて、それも調べてみました。



習い事をしている子は、していない子よりも語彙得点が多いのですが、ピアノやスイミングなどの芸術・運動系を習っている子と、受験塾や英語塾や公文塾など学習系の塾に行っている子の間では差が全くありませんでした。ということは、塾でやっている学習内容が語彙を豊かにしているわけではないのです。習い事をすることによって、コミュニケーションが多様になる。保育園や幼稚園の先生、家庭のお父さんやお母さんとは違う大人に出会う。スイミングのコーチや英会話塾のネイティブスピーカーと出会う。そこでの会話も、保育所や幼稚園や各家庭の中での会話に出てこないような言葉、「ダイビングして」とか「バタフライしよう」という言葉を聞くわけです。ということで、語彙が豊かになるのは、会話が多様になるためではないかということで、塾でやっている学習内容が語彙を豊かにしているわけではなかったのです。

さらに、習い事に行くと落ちてしまう能力があることが分かりました。運動能力です。杉原隆先生たちのグループでは、3、4、5歳児9,000名を対象に、全て個人検査で運動能力の発達を調査しました。体操教室・バレエ教室・ダンス教室に通っている子や体操プログラムを重点的に行う〇〇式幼稚園、〇〇式保育園に通っている子どもの運動能力が統計的に有意に低く、運動嫌いがとても多いことが分かりました。なぜだろうか。全国調査なので、いろいろ教室に行って観察して調べてみました。

原因が分かりました。三つありました。特定の部位を動かす運動・トレーニングをしているので、子どもたちにとってはやりたくもないのにやらされていますから、面白くないのです。それから、説明を聞き流している時間がとても多くて、肝心の体を動かす時間が少なくなっています。また、展示ルールは5歳後半に獲得されるので、そうすると人目を気にするようになります。お友達よりできないと嫌になってしまい、体操教室に行きたがらなくなる、運動嫌いになるという悪循環が起こっているということが確認できました。

杉原先生が提案されているのは、とにかく自由遊びです。保育環境の問題で、登ったり、渡ったり、運んだり、ぶら下がったりできるような、起伏の多い環境を用意する。それも、うんていやジャングルジムといった名前の付いた遊具がなくても構わない。酒屋さんからビールケースをもらってきたり、自動車のタイヤ工場から古タイヤをもらってきたりして、園庭の片隅に置いておけば、子どもたちはそれを引き出して階段を作って登ったり、いろいろします。そう



いうもので十分に体を動かす環境を用意してほしいのです。また、運動会が終わると運動遊びが途端に増えますから、先生方も運動遊びの楽しさを知らせるような働き掛けをしてほしいです。何よりも遊びを大事にした子ども中心の保育が、子どもの運動能力の発達にはいいのだという発表をしました。

語彙についても同じことが言えました。幼稚園と保育園で語彙得点には差がありませんでした。差は保育形態によるものでした。遊びを大事にした自由保育の幼稚園や保育所の子どもは、一斉保育で文字を教えている、英会話の時間や計算の時間を設けている、1年生の教育を先取りして教育しているような幼稚園や私立保育園の子どもに比べて、語彙得点が高くなったのです。これはソウルもウランバートルもハノイの結果も全く同じでした。シャンハイは全てが一斉教育なのでこの分析はしませんでした。というわけで、やはり、遊びを大事にした保育形態が重要なのです。これが子どもの語彙を伸ばすのに適しているのだということが分かります。

さらに、2020年から英語が小学校3年生から導入されるのを受けて、このごろ英会話スクールのバスが保育園に子どもたちを迎えにきて、英会話の塾に連れていって、そしてレッスンが終わるとまた保育園にバスが送ってくるというところが増えてきました。このあたりはどうでしょうか。東京でもすごく教育熱心な親がいる新興住宅街というか、松戸市の保育所はもうそういうのが日常茶飯事になっています。英会話塾に幼児期の3歳ぐらいから行かせているわけです。これって本当に役に立つのか気になりますね。

それで、私はお茶の水女子大学附属中学校の子どもたちに協力してもらって、幼稚園や小学校で英会話塾に行ったか、行かないか。行ったという子どもたちの英語の学力はどうなのかということを10年間追跡してみました。テストは2割はヒアリング・聴解問題で、8割が読解問題の、大学入試のセンター試験と同じ構成の問題を作りました。すると、1年生の1学期末試験から、英会話塾に既に行った経験がある既習者と、行ったことのない未習者との間に、成績の差は全くなかったのです。

どうしてお茶大の附属中学なのかというご質問があるかもしれないので、少し補足的に説明しておきますと、やはり親たちの学歴が高く、また所得も高い親が多いのです。だから家庭の蔵書数も多いのです。そういう要因は全て釣り合っているのに、英会話塾に行ったか、行かないかという要因だけが違うサン



ブルを得ることができるからなのです。それでやってみての結果です。

もちろん、テストを他のテストにしたら、例えば「金髪碧眼の人を見たときに怖がらない」なんていうテストをしたら、英会話塾に行っている子どもの方が怖がらないということはあるかもしれません。しかし、親たちが幼児期から英会話塾に行かせようというのは、いい大学に入ってほしいと思っているからではないですか。だからセンター試験と同じテストをしたわけです。そこで差がない。さらに、既習、未習にかかわらず、家庭での学習習慣がない生徒はどんどん成績が落ちていきます。英語だけではなくありません。数学も理科も国語も社会科、歴史も全て、成績が落ちていくことが確認できました。

昨年秋に、秋田県大館市に、小中学校の先生方の論理科の研修会に行っていました。秋田県大館市は活用力問題が日本一なのです。日本一の秘密を探ってきました。大館市には塾は一つもありません。ただ、40年前から取り組んでいることがあります。帰宅後の自主学習の時間です。小学校に入った途端に白いノート1冊を、「好きなことを書いてきていいよ。明日、先生に見せてね」と渡します。クワガタが好きな子は一生懸命写生して出します。「すごいクワガタ見つけたね」。こんなワンセンテンスが赤ペンで書かれます。その先生のコメント読みたさに、また次の日もいろいろな虫を描いていき、虫博士になってしまった子がいます。これは40年取り組んでいるのです。先生がコメントを書く月間ばかりではなく、お父さん、お母さんがコメントを書く月間もありますし、おじいちゃん、おばあちゃんがコメントを記入する月間もあるのです。こうやって、地域を挙げて、親も祖父母も、先生方も子どもの育ちを応援している。そういう市なのです。これが活用力、考える力を育てる上で、すごく良かったのだらうと思いました。

さらに、言葉はやりとりを通して習得するものですから、スピードラーニングやヒアリングマラソンなど、テープを聞いて次の日から英語べらべらですというのは、中学、高校、大学のときに英語をしっかりと学校で勉強した人たちだったら、テープによる学習も効果があると思われそうですが、赤ちゃんのときに語学のテープを聞かせてもそれは全く効果がないばかりか、脳萎縮を起こしてしまうというデータがあります。ペンシルバニア、ニューヨーク、サンフランシスコで、満期出産で健康な赤ちゃん1,800名を6年間追跡した調査結果が、2007年の小児医学雑誌に発表されました。500名ぐらいの子どもはどんどん言語発



達、知能発達が遅れていきました。この子たちに一体何があったんだろうか。生活時間を調べてみたら、「ベイビー・バッハ」「ベイビー・アインシュタイン」という早期教育のDVD教材を1日に1時間以上も、生後6か月～10か月間浴びせられていた子どもたちでした。3歳まで遅れてその後持ち直した子どもは、その映像が放映されはじめると嫌がって逃げ出したり、ビデオ装置を操作して止めて避難したりした子どもでした。

1,800名のうちの3分の1、600名ぐらいは順調に言語も認知も発達していましたが、この子どもはそういった教材には一切触れず、せいぜいセサミストリートのような日常の幼児番組を10分程度は見たことがある子どもでした。

小児神経医のChristakisが、NIRSという脳活動を可視化する装置を使って、それぞれの子どもたちの脳活動を調べてみると、早期教育のDVD教材を1時間以上も浴びせられていた子どもは、知能を担っている、言語理解をつかさどる言語野（ウェルニッケ野）が萎縮してしまっているということが確認されました。

実は「ベイビー・バッハ」「ベイビー・アインシュタイン」を売り出していたのはディズニー社だったので、このデータが発表されるやびっくりして、全部回収して親たちにお金を返しました。日本では講談社が取次店をしています。私はそこの理事をしているので、「ちょっとあれ、危ないですよ」ということで、2年前から一切売らないようにしています。小さいうちにドリル学習やDVDを使った反復学習をさせるようなテープを浴びせることは、脳萎縮を起こしてしまう原因になります。フラッシュカードを使った教育も危険です。そういうことやっている親にはやめるようにおっしゃってください。

それから、スマホで子育てしている親がいます。鬼から電話がくるアプリは、赤ちゃんの不安感をおおるような低周波の音を出すので、脳がおかしい状態になるようなもので、赤ちゃんはいつか泣きやみますが、中身が分かって泣きやむのではなく、一時的な脳梗塞状態を起こして、発作を起こして静かになるだけです。これを長く続けると、本当にウェルニッケ野が萎縮してしまうので、後からいくら塾に投資しても間に合いません。ということをぜひ保護者にお伝えください。

しつけスタイルと語彙の間にも関連がありました。語彙得点が高い子どもは、共有型しつけを受けています。親子のふれあいを大切にして、子どもと楽しい



経験を共有する、子どもが好きそうなことを考える、そういうしつけスタイルを取っている家庭では子どもの語彙が豊かです。それに対して、語彙得点が高い子どもは強制型しつけを受けていることも分かりました。子どもがすべきことをするまで、何度でも事細かに説明する。責め立てる。子どもがした悪いことには罰を与えるのは当然。時には力のしつけもあります。殴ってしつけます。子どもを自分の思うとおりに育てたい、こう思っています。そして、禁止や命令の言葉をたくさん使います。これがしつけだと思っている強制型しつけの親の下で育てている子どもは、いかに家庭が高所得であっても語彙得点が低くなるという関連が検出されました。

小学校になってPISA調査を受けてもらったところ、幼児期の絵本体験が豊かで語彙が豊富な子ども、造形遊び、ブロック遊びが多く、指先が器用な子どものPISA型学力が高くなりました。同じ子どもを追跡していますので、これは因果関係で、相関関係ではありません。これはハノイでもウランバートルでもソウルでも同じ結果が得られています。幼児期に共有型しつけを受けた子ども、遊びを大事にする子ども中心の保育の幼稚園や保育所で育った子どものPISA型学力が高くなります。しつけスタイルや保育の形態は親がコントロールできる要因ですから、希望が持てます。園の方でも対応ができます。

そうすると、この文科省の発表は何だったのかということですが、実際に結果を取り寄せてみると、幼稚園＞保育所＞未就園という不等号が付くようなことはありませんでした。2010年という、認定こども園の構想が発表されて、文科省が管轄するか、厚生省が管轄するかで綱引きがあった年だったのです。多分に戦略的な発言であることが分かりました。幼稚園・保育園の保育の質の違いが、小6・中3まで続くななんて考えられません。世帯の所得格差やしつけのスタイルの違いが学力格差につながっているのではないかと思います。幼児期に大人が、つまり保育者が、親が子どもの主体性を大事にするかどうか。これが肝心なのだということになります。

2-3. 「遊び」を通して子どもは学習する

さらに、共有型・強制型しつけの中で、どんな会話が子どもの語彙力に影響するのか調べてみました。900万円以上の高所得で、母親が4年制大学卒あるいは大学院修了の高学歴の専業主婦の家庭を200世帯、東京都内で抽出して、



しつけ調査をしました。強制型しつけ30組、共有型しつけ30組。家庭の雰囲気はそっくりですが、しつけのスタイルだけが違う30組ずつを1軒1軒家庭訪問して、親子の会話、ブロックパズルの解決場面や絵本の読み聞かせ場面の会話を収録しました。

分析した結果、共有型しつけでは考える余地を与える援助的なサポートが多く、子どもに寄り添って、子どもに敏感で、子どもに合わせて柔軟に働き掛けを調整します。「洗練コード」と呼ばれる話し方が多いのです。電話がかかってくると、「ごめんね、ちょっと待ってて」と出て、「今、来客中だから、後でかけ直すわ」と言って、すぐに戻って「ごめんね。電話が終わったから、遊びの続きをしましょう」、これが洗練コードの例です。三つのH、「褒める、励ます、広げる」の言葉掛けがとても多いです。子どもが楽しそうに遊びに熱中している姿が映像に映っています。

それに対して、強制型しつけでは「制限コード」と呼ばれる話し方が多いです。さっきのような電話がかかってくると「ちょっと静かにね」これしか言わない。長々としゃべって、「さ、続き」という話し方です。子どもに考える余地を与えない、指示的・トップダウン的な介入が多く、過度に介入します。4歳の息子に向かって「ほら、線対称に並べて。線対称に並べるのよ」、数学の大学院を修了したお母さんです。絵本の読み聞かせを終えた後、「今のお話、どういうお話だった？ 言ってごらん」、5歳の息子に命令します。子どもが何か言うと、「違う、ママそんなふうには言っていないよ。これ、読み直してごらんさい」と読み直させます。「ほらね、違うじゃない。ママの言うこと聞いてないんだもん、お話の記憶、テストに出るわよ」と威嚇しているのです。それで三つのHの言葉掛けは皆無でした。その下で子どもはおどおどと母親の顔色を見ながら行動している様子が映像に映っています。

さて、この子たちが大人になったら、どんな違いになって表れるか知りたくてたまらなくなりました。あと20年追跡したらその結果が出てきますが、そこまでやったら私は90歳を過ぎてしまうので、手っ取り早く23～27歳の成人の息子や娘を二人ないし三人育てたご家庭を2,000世帯首都圏で抽出して、ウェブ調査をしました。息子や娘の出た出身大学、学部、職業を全部記入してもらいました。ちゃんと謝金を渡しました。そうしないとデータが得られないの



です。

そうすると、受験偏差値で68以上の難関大学・学部出身者、最難関といわれる国家試験を受けないと就けない職業、例えば、弁護士、検事、外交官、医者などに息子や娘がなっていると答えたご家庭、難関突破組をそうではない家庭と比べてみました。それがいいというわけではないですけどね。そうしたら、難関突破組の親は、幼児期に子どもを思いっきり遊ばせた、遊びの時間を子どもと一緒に過ごすことが多かった、絵本の読み聞かせにも注力した、赤ちゃんのときから読み聞かせた、子どもの趣味や好きなことに集中して取り組ませたという共有型しつけが多かったのです。

というわけで、全部の調査をまとめると、遊びを通して子どもは「楽習」します。「楽しく習う」です。「遊び」というのは、仕事に対立する概念ではありません。また、怠けることを意味するものでもないのです。幼児にとっての遊びとは、自発的な活動であり、頭が活き活きと活発に働いている状態を指しています。漢字学者の白川静さんは、「遊」の語源として、「遊ぶとは絶対の自由と創造の世界のこと」であると言っています。

次期学習指導要領の目玉が、昨年8月26日に発表されました。3法、幼稚園教育要領、保育所保育指針、教育・保育要領も改定されました。学びの質の改善をどれも目指しています。何を学ぶかではなく、どのように学ぶかという視点が取り込まれました。子どもが主体的・能動的に授業に参加するアクティブラーニング、つまり、対話的で主体的な深い学びが起こるような環境を用意することが目玉になりました。というわけで、「子ども中心の保育」の場では、既にプレイフル・アクティブ・ラーニングが実践されています。

3. 子ども中心の保育の真諦 遊びを通して子どもは伸びる

3-1. 保育者の適切な援助の与え方

保育者の統制が大きい・小さい、子どもの自発性を大事にする・軽視するで4象限マトリックスを作ったときに、第4象限に入るのが一斉保育で、1年生の教育を先取りして、文字を教えたり、英会話の時間を設けたりしている幼稚園・保育所です。それに対して、子どもの自発性を大事に、保育者の統制が小さい、子ども中心の保育の自由保育が、第2象限に入ります。語彙力も運動能力も子ども中心の保育で育っている子どもに軍配が上がりました。



子どもの自発性が発揮されるのは、保育者の権威が最小限に抑えられたときです。子どもと対等、子どもの視線で、しかし教育者としての役割も取らなければいけないので、やはり現象の表面だけを捉えるのではなく、子どもの心の動きやつまづきまでも洞察してほしいと、堀合文子先生はおっしゃっています。

幼稚園の教育要領を改定するための根拠データを出してほしいという幼稚園課の依頼があって、私は3年前に国立大学法人附属幼稚園の研究紀要を全て内容分析しました。私の研究室で博士号を取得して、各養成校の教員をしている研究者五人をピックアップし、さらに実践者代表として、国立大学法人附属幼稚園の副園長先生の中から良い実践をしている副園長先生五人を選び、研究者と実践者をペアにして、国立大学法人附属幼稚園は49園ありますが、12園ぐらゐを分担して内容分析しました。

そして、幼児期特有の論理的思考力の発達について、また、保育者の援助の種類について、全て分析し終わり、それは『保育科学研究』に論文として投稿してあります。「乳幼児の論理的思考の発達に関する研究」の抜き刷りをダウンロードできるようになっているので、日本保育協会のホームページに行って、『保育科学研究』の第5巻を皆さんお読みくださればと思います。

結果です。高校生の論理的思考の要素を分類基準として、幼稚園での子どもの遊び・生活から事例を抽出しました。どの年齢からも相当たくさんの事例が抽出されて、全部で328事例抽出できました。3歳児においても、4～5歳児に匹敵するくらいの事例が抽出されました。ということで、やはり幼稚園ではもう子どもたちは論理的な思考力を遊びの中で働かせている。それが確認できました。

分類基準に使った高校生の論理的思考の要素は、①規則性・法則性、②比較・分類、③全体と部分、合成と分解、④因果推論、⑤仮説・確認に分けられます。例えば、①規則性・法則性には枝を拾って長さ順に序列的に並べるような遊び、②比較・分類には赤いアサガオ、青いアサガオを別々のカゴに入れて、ペットボトルに入れて赤い色水、青い色水を作り、それを第3のペットボトルで混ぜ合わせてマゼンタ色にするような遊び、③全体と部分、合成と分解には、みんなで分解して数えて合わせるという事例が入りました。例えば、池のコイを数えるという事例が鳴門教育大学附属幼稚園の紀要2月の報告にありました。一人の子がコイを数えはじめましたが、コイが動いてしまいます。そこで三人

の友達を呼んできて池の端っこに等間隔で立たせて、「それぞれが手をたたいて、自分のところにおびき寄せたやつを数えればいいんじゃない？」と言いました。これは分解ですね。そうやって数え終わりました。その後です。全部で何匹か困ってしまいました。「数えたはいいものの、全部で何匹だ？」。漫画で言えば、子どもたちの頭の上に？マークがたくさん出ているような場面です。担任はどうしたか。しばらく見守っていて、次に近寄ってあることをしました。先生方がその担任だったら、どうなさいますか。ヒントは、鳴門教育大学の附属幼稚園は玉砂利がたくさん敷いてあるのです。どうでしょうか。

(フロア) 「石を並べて数えたら？」と言う。

(内田) そうなのですが、言い方が問題です。鳴門の先生は石とは言わないのです。1個だけ取って、「これなら動かないんじゃない？」。これだけなんです。動かないのではないかという性質だけを言ったのです。どうしろとは言いません。子どもは受け取って、うなずいて、自分の数だけ拾う。次の子もそれを見て拾う。その後みんなで声を合わせて、「1、2、3、4…石は全部で64個。じゃあ、池のコイは全部で64匹いるんだ」。子どもたちは大満足でした。

さて、こんなすてきな体験を残りの子どもたちは知らないわけです。国立大学法人附属幼稚園では、帰りの会、サークルタイムをやっています。これが幼小の接続を意識した取り組みです。円陣になって、その日の遊びを報告し合ったり、紙芝居を見せてあげたり、絵本を読み聞かせたり、歌を歌ったり、遊びに関連したものを題材に選んで行います。この日も三人の当番さんが発表しようと思って待っていました。そうしたら、担任からこう言いました。「今日ね、池のコイを数えた人たちがいるんだけど、その人たちに発表を変わってもらってもいい？」。一人ずつ顔を見ながら許可を取りました。三人とも「うん、いいよ」とうなずいてくれたのを確認しました。そうしたら、それを聞いていた四人の子どもは立ち上がりました。「僕たちさ、今日、池のコイを数えたんだ。全部で何匹いると思う？」「分かんない」「全部で64匹だよ」「えーっ、64匹もいるの？」「そう、僕たちさ四人で池の端っこに立ってさ、手をたたいてコイをおびき寄せたの。コイってさ、手をたたくと寄って来るじゃん」、お当番のときはいつもえさやりをしていますから、子どもたちは「うん、うん」とう



なづいています。「自分のところに寄ってくるのだけ数えて、その後、石を拾ったの。ほら、石って動かないじゃん。だから、石を拾って、それを全部数えたら、石は全部で64個あったから、コイは64匹なんだ」。すごーいという顔をして子どもたちは聞いています。

先生が渡してくれたというのは忘れていますが、「動かないもの」を「動くもの」の代わりに置き換えてやれば、「動くもの」を数えることができるという、動かないシンボルに置き換えるという一番肝心なところは、きちんと子どもたちに言葉で伝えているのです。きっとその翌日、コイを数える子がいたに違いない、石を拾ってくる子がいたに違いないと思います。このようにして、記録を全て分析しました。

④因果推論も結構ありました。可逆的因果は、先ほどの実験では5歳後半でしたが、遊びの中では平気で3歳から出ています。「あれ、シャベルここに置いたはずなんだけどな。隣の組の○○ちゃんが持ってっちゃったのかな」というふうに、原因にさかのぼるようなことをしょっちゅうやっています。

⑤仮説・確認もありました。この5種類が高校生の使っている論理的思考力の要素なのですが、これからどうしてもはみ出してしまいうものが結構あることが分かりました。それはいざこざの場面でよく観察されます。「僕、1番にやる」「いや、駄目。私やりたい」「じゃんけんにしたら？」「あみだにしたらどう？」「背の小さい順がいいんじゃない？」など、いろいろなことをわいわい言って、結局じゃんけんにして決めるという、こういう決め方、交渉の仕方も頭を使っているの、「人との関係性」と名前を付けました。大人にない要素です。大人は自問自答して、頭の中で解決ができます。子どもは思考力の発達途上にあるので、人の反応の見ながら自分の考えを変えるということがよくあることが分かりました。それが人との関係性です。そうやって数えてみると、人との関係性はどの面でも結構、たくさん出ていることが分かります。

さらに、保育者の援助の水準も調べてみました。①見守り：いつでも足場を掛けられるようにする。②足場掛け：見晴らしを良くしてやる。決定するのは子ども自身。③省察促し：「どうしたらいいかしらね」と子どもに考えさせる。さっきの鳴門の先生の「これなら動かないんじゃない」というのがそうです。④誘導：「ここをもう少し穴を大きくしたら入るんじゃない？」のように、具体的な解決策・手立て・考える道筋を与える。⑤教導：解答や解説をトップダ



ウンに与える。①から⑤になるに従って、大人の統制力が高くなりますが、国立大学法人附属幼稚園の先生方の中に、教導というような働き掛けは1回も観察されませんでした。みんなで集まって分析したのですが、「すごい保育をやっているね、禁止や命令や教導、答えを与えなくても、これだけすてきな保育ができているのだ」と、みんなで拍手しました。

適切で適時の援助の与え方については、保育者は子どもと対等です。放任ではなく、援助は与えてほしい。援助の与え方ですが、あくまでも見守り、足場掛け、省察促し、そして誘導までであって、教導は最後、できたら避けていただきたいと思います。発芽しかかっているところ、これを旧ソビエトの心理学者Vygotskyは「発達の最近接領域（ZPD：zone of proximal development）」と呼びます。ここに働き掛けることによって、援助の効果は倍加するという概念を、統計学者のCronbachが「適性処遇交互作用（ATI：aptitude treatment interaction）」と呼んでいます。適性というのは能力の発達の程度のこと、処遇というのは援助のことです。この二つの概念をしっかりと覚えて帰ってほしいと思います。

AとBという二人の子どもがいたとします。Aの子どももBの子どもも5歳6か月なのに、普通のやり方で知能テストをしたら、自力で7歳レベルの問題まで解くことができたので、精神年齢は7歳と判定されます。しかし、ここでテストの仕方を変えて、少し援助やヒントを与えてあげると、Aの子どもは9歳レベルまで、Bの子どもは7歳半の問題まで解けた。この不可能な水準と完成した水準の間の可能的な水準のことを発達の最近接領域と呼びます。

では、「働き掛ける前に、目の前の子どもの発達の最近接領域を知ることができますか」というご質問があると思うので、答えを用意してきました。三つの手掛かりがあります。一つ目は、保育者の保育経験です。目の前の子どもを見たときに「私、3年前にこういう子とよく似た子を担任したわ。こういう子は好奇心いっぱい、すぐにやりたがるけど、飽きっぽいのも困るのよね」と、飽きてしまわずに集中し続けるために、どんな言葉を掛けてあげたらいいか手立てが推測できます。二つ目は、子どもが模倣できるかです。「僕たちもやりたい」と言ってやってくる子がいます。自分では思いつかなくても、年長さんがやりはじめたのを見て刺激を受けてやりたくなった。これが模倣の例で、これは見えやすいです。三つ目は、子どもの生活歴です。先生方は子どもの生活



歴を持っていますよね。三人男兄弟の2番目、きっと自己主張が強いのだろうな、目立ちたがり屋さんじゃないかな、負けず嫌いじゃないかな。そういう生活歴から、その子の持ち味はある程度推定できます。この三つを使って、適切な援助、適時の援助を与えます。そして、もう一つの大事な方針として、教え込みをしない、教導は慎重にする。そして、言葉を掛け過ぎない。言葉を抑えることが大事なのです。

堀合文子先生の保育実践を紹介します。11月、4歳児クラスです。サヤカちゃんという造形の大好きな子が「馬を作って」と言ったので、堀合先生が馬を描きはじめました。「角と羽も書いて」「えーこれじゃないの？ 角」「ユニコーンって普通の馬みたいなんだけど、たてがみがなくて、角があるの。それで不思議な力を持ってるの」「キリンみたいなの？」「ユニコとかあるでしょ」「知らない。教えて？」。この間に他の子の手助けをしてから、また戻ってきます。「あなたの馬、どうなるかよく分からないんだけど、あなた、ここに書いてみて。どこかのご本にあるといいんだけど」と図鑑を取り出した。「出てないよ。空想の動物だもん」「じゃあ、さっきの馬に角、描いてみてよ。そしたら、どんなにか分かるでしょう」「耳がなくて、つるっとしてるの」サヤカちゃんは描こうとはしません。先生は「ああ、面白いわね」とそれを褒めます。「こうかな？ こういうの？」と聞いても黙って先生の手元を見えています。

「角はこういうの？」先生は紙に試しに2本の角を描き込みます。「2本もないのよ」「1本？」「うん。1本」「こんなかな？」1本の角で、足をぱっと開いた馬を描きました。サヤカちゃんは「走ってるのじゃない。止まってるのが言ったでしょ」と言いましたが、実際には止まっていたなんて言っていませんでした。でも、「サヤカちゃん、そんなこと言ってないわよ」と言ったのでは強制型しつけのお母さんのようになってしまいます。堀合先生は共有型ですから、黙って受け止めます。イメージを持つと、言ったと思ってしまうのが4歳児の特徴です。

「これじゃ駄目？」先生は最初に描いた馬に1本の角を描き加えました。これは足を閉じて立っているものです。「羽があるの」「あ、ペガサスのこと？」サヤカちゃんは黙って考えています。しばらくして「目をつぶるとしわがあるの」と言いました。もうサヤカちゃんがペガサスを知らないということは分かったので、先生はそれ以上言わずに「よく見てるのね」と三つのHの言葉の一つ



を掛けました。

さあ、次です。もう一度、羽を描き込むことができるような一番大きな大判の画用紙を持ってきて、そこに先生は、1本の角で、止まっている馬を描きました。サヤカちゃんはクレヨンと割り箸とはさみを取ってまた戻ってきました。「ユニコーンは?」「描いたわよ」「それ?」描き直した馬にまだ羽が描き込まれていなかったのです。「羽、後で付ける?」「いい」。ささっと羽を描き加えました。それを見て満足そうにうなずきます。彩色し、切り抜き、ペープサートを作成しました。そのとき、サヤカちゃんが作ったペープサートは、足を閉じて立っていて、羽が付いているものです。

この保育を見ていて、私は分かりませんでした。羽は最初は描き込んでいなかった。それと、もう一つ。「羽、後で付ける?」とおっしゃった。後で付ける。どうしてなのだろう。保育を見た後は必ずカンファレンスをするので、伺いました。わけが分かりました。堀合先生の頭の中には、羽は別の紙で作って胴体に付けたら持って歩くときにひらひら動くようなペープサートがイメージされていました。「そこで、ヒントを出しました」とおっしゃいました。しかし、サヤカちゃんは「羽、後で付ける?」という言い方で、このユニコーンがイメージできなかったのです。「早過ぎたなと思ったので、私は引っ込みました」とおっしゃいました。「えー、私だったら言っちゃいそうです」とそのとき言ったら、「大人が子どもに代わって考えてしまったら、子どもは考える力が育ちません。大人が子どもに代わって創造してしまったら、子どもの想像力は育たないのです。大人の親切は子どもに迷惑を掛けることを考えなければいけません」。実際に3学期になれば、サヤカちゃんは「羽、後で付ける?」という言葉だけで、今のようなペープサートを作るようになっていきました。

3-2. PDCAサイクル

保育計画はミッション（活動の項目 例：そうめん流し）＋ビジョン（なぜその活動が必要か 例：協力してそうめん流しの軌道を作ることで対人関係を育てたい）です。原則としての保育計画にはとらわれないでください。年間計画、月間計画、週案、日案にこだわると、子どもの姿や思いが見えなくなります。保育計画は子どもに体験させたい活動の目安です。活動に取り組む時期も期間もゆるやかに、子ども一人ひとりの興味、関心、発達過程に合わせて、そ



して1年かけてどこかで実践できればいいぐらいのつもりで取り組んだ方がいいのではないかと思います。

そして、これは新・保育所保育指針の9ページにあります。全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、環境・ことば掛け・援助を工夫すること。子どもの発達について理解し、一人ひとりの発達過程や状況を踏まえて保育すること。この一人ひとりの発達過程、状況という言葉が3法のどれにも入ってきました。これは共通の言葉です。子どもの発達を認めないといけないのです。ぜひ、そこを大事にしてほしいです。

そして、「ミッション」と「ビジョン」を持ち、環境を準備するのですが、ミッションは絶えず目の前の子どもに合わせて再構築できなければいけません。「どうしてもそうめん流しを今日やる」と決めてやるのではなくて、「ああ、子どもの気持ちがばらばらだ。じゃあ、やめよう」というのでいいのです。やりたくない子はやらなくてもいいという具合に、でも、お友達がやっているとやりたくなって、つられてやります。だから、そこをすごく大事にしてください。

それから、保育記録（ドキュメンテーション）です。新人の先生、大変でしょう。これは自分の保育力を磨くためのものです。その日の実践を振り返るための記録です。明日のエデュケア、養育と教育の質向上のための手段です。メモを取ったり、デジカメの音を消して写真を撮ったりして、活動の変化を記録してください。ビデオを撮り過ぎると、保育した時間、全部見直さないといけないので、これはちょっと無謀な試みですから、私はデジカメがお勧めです。メモは、今井和子先生もいつもおっしゃっています。今井先生はポケットにメモ帳をいつも用意しておいて、子どものつぶやきを拾っておられたのです。それがいいと思います。これは保護者と共有する手段でもあります。保育記録を模造紙に貼って、「こんな活動を展開しました」と保護者にもお知らせする。あるいは、子ども一人ひとりの保育記録にも少し記します。

そして、私が願っているのは、適応的エキスパートに成長してほしいということです。達人には日常的なエキスパート（routine expert）と適応的エキスパート（adaptive expert）があります。日常的エキスパートとは手続きをしっかり覚えて、それを当てはめて正確に使って仕事をするエキスパートです。世の中には日常的エキスパートが必要な部分もあります。電車の運転手さんもそうです。その日の気分で「この駅に止まるのやめようかな」ということは許さ



れません。しかし、保育者は日常的エキスパートではありません。保育者は、その日の状況に合わせて新しいデザインを生み出す陶芸家のようなアーティストだと思うのです。適応的エキスパートでなければいけません。保育者は適応的なエキスパートに成長し、単に手続きが分かるだけではなく、目の前の子どもや状況に合わせて、子どもへの援助の仕方を修正し、より適応的なものへと変えることができればいいのです。

先輩や同僚から学んでください。振り返りのための保育カンファレンスを10分でもいいので設けてください。保育の改善と保育の質の向上を図ることが大事です。さて、保育評価が問題になります。全部入ってきました。PDCA、Pはプラン、Dは実践、Cはチェック（保育の振り返り）、Aはアクション（改善して、次の実践を作る）です。そのCは保育カンファレンスによって行います。このときにポートフォリオやレーダーチャートを使ってはどうかと私は提案したいと思います。

しかも、評価は後向きの評価ではないのです。これから先、どこを改善するかということを見つけるための評価を形成評価（formative evaluation）と呼びます。ポートフォリオ。これは聞いたことがあると思いますが、遊びや生活、学びの履歴です。保育記録がそれに当たります。そして、レーダーチャートを活用してください。5領域が入ってきました。環境・表現・言葉・人間関係・健康の領域です。それぞれには細かく、健康・生活、思考力、言葉（絵本）、感性と表現（音楽・造形・身体表現）、対人関係・市民意識・社会規範（社会での約束事）に気付くというものが入ってきました。

乳幼児保育を担当されている方も多いと思いますが、未満児、0歳児の保育内容の記載のイメージを厚労省の鎮目専門官と話し合ったのですが、やはり子どもの発達を見ると、なだらかな平原のように見える、日々の生活の中で、先ほどの5領域の峰が少しずつ高くなって山脈になっていくというイメージで、赤ちゃんのときにはこれらが未分化で混じり合っているイメージです。人間関係、言葉、表現、環境、健康、これらが独立していなくて、ごちゃごちゃになっている感じです。養護です。生活、遊びを通して子どもたちの身体的、精神的、社会的発達の基礎を培っていきます。養護だけではなく、0歳に教育も入ってきました。それが今度の改定の特徴です。エデュケア、両方なのです。



3-3. まとめ

まとめると、子ども中心の保育での教育は、養護（care）があって生命を育み、主体的な学びが起こる、教育（education）はおまけぐらいに考えたいと思います。私がそれを言い直すと、主体的な学び（遊び）の環境を子どもの発達に合わせて作り、子どもをわかから支えるのが保育の仕事であります。

そこで、子どもの思考力や想像力を育む援助のキャッチコピーを作りました。「頭はいつも先回り・援助は後からついていけ」もう覚えられたでしょう。1、子どもに寄り添う、かわいがってください。2、その子自身の進歩を認め、褒めてあげてください。他の子とは比べない。褒める、励ます、（視野を）広げる、3日間の言葉を掛けて保育をしてください。3、生き字引のように余すところなく定義や解説、解答を与えないでください。4、裁判官のように判決をくださないでください。禁止や命令ではなく、「○○したら？」と提案の形でお願いします。そうすれば、「僕したくない」と選ぶことができます。これが大事なのです。5、何よりも大事なのは、子ども自身が考え、判断する余地を残してあげることです。このことで、自分で考える力や新しいものを生み出す力、PISA型学力の基盤力になる創造的想像力が育まれていきます。

というわけで、子ども中心の保育とかけて、盆栽と解きます。その心は、「待つ（松）」と「聴く（菊）」です。しっかり待って、子どもの心の声をしっかり聴けば、子どものつまづきを見抜く洞察力が湧いてきます。そうしたら、子どもの考えが進むための足場を掛けてあげることができるのです。足場（scaffolding）は、1981年、教育心理学者のブルーナーが『教育の過程』という本の中で提唱した概念です。大人は足場を掛けることができます。しかし、大人ができるのはそこまで。その足場に上るか上らないか、上ってどんな作業をするか、決定する主人公は子ども自身である。それが足場掛けの意味です。良い、適切な足場を掛けてあげれば、4歳5歳の幼い幼児が自力で科学者と同じような仮説確認のプロセスを進むことができます。

最後にこれをご紹介します。秋田大学の学長、渡辺万次郎さんが、お孫さん5歳、4歳が郊外に散歩に出掛けたときのことを『理科の教育』という雑誌に発表しておられました。

「私はかつて幼稚園の二児を近郊に伴った。彼らは『みやこぐさ』の花に注意を引かれたが、その名を問うほかに能がなかった。当時、私どもの菜園には、



同じ豆科の『えんどう』の花が咲いていたので、私は名を教える代わりに、その花を持って帰り、おうちでそれによく似た花を見出すようにと指導した。

彼らが帰宅後、両者の類似を見出した時には、小さいながらも自力に基づく新発見の喜びに燃えた。やがて一人は『みやこぐさ』について、『これにもお豆がなるの?』と尋ねた。それは誰にも教えられない、独創的な質問であった」

大人は質問に答えることはできますが、質問の仕方を教えることはできないのです。花の類似からすごい推理を働かせた。だからこそ答えは言いませんでした。代わりに足場を掛けました。

「私はそれにも答えず、次の日曜に彼らに現場で確かめることを提案した。

次の日曜に彼らがそこに小さな『お豆』を見出したとき、そこには自分の推理の当たった喜びがあった。

秋がきた。庭には萩の花が咲いた。彼らは萩にも豆のなることを予測した。彼らは過去の経験から、いかなる花に豆がなるかを自主的に知り、その推論を独創的にまだ見ぬ世界に及ぼしたのである」。

星の王子さまが帰っていきますので、私の話を終わりたいと思います。星の王子さまが地球に着いたとき、小さなキツネが言いました。「大切なものは目に見えないんだよ。心の目でないと大切なものは見えない」。その心の目、創造的想像力を育てることが保育の課題であると思います。To be continued、この続きは先生方に各園で、素晴らしい実践をしていただきたいと願っております。